

館蔵『仏露字書』綺談

中 村 喜 和

一橋大学附属図書館に収められている洋書の中でたぶん最も早く日本に伝わった書物は、一七九八年にペテルブルグ(現在のレニングラード)で出たフランス語⇨ロシア語辞書の上巻であろう。その編者はイワン・タチーンチェフ、上下あわせて二千頁に近いこの本が不思議な機縁でわが国にもたらされたのは、まだ鎖国時代の文化八年(一八一二)のことである。

本書の旧蔵著はロシアの海軍士官ワシーリイ・ゴロヴニンであった。彼の名前は『日本幽囚記』や『世界周航記』の著者として広く知られているが、軍人としては晩年に海軍主計総監を勤めて中将にまで昇進し、ロシア艦隊の増強にいちじるしい功績を挙げたとされる人物である。ゴロヴニンがこの辞書の最初の所有者であるという動かぬ証拠は、表紙の裏、見返しの左肩にかすかに読みとれる次のような識語である。

Из книгъ Василя Головина

в Писербургѣ Мая 16, 1802

Цена двумъ частямъ 14 р.

これを訳せば、「ワシーリー・ゴロヴニン蔵書／於ペテルブルグ、一八〇二年五月十六日／値段、二冊十四ルーブリ／二十七番」である。二十七番は蔵書番号であろうか。インクの色は褪せて、もはや鉄分の錆だけが薄茶けて残っているにすぎないが、筆跡は暢達である。

ゴロヴニンは一七七六年、古い家柄の貴族の子としてリヤザンの領地で生まれた。幼いときに両親を失って孤児になったが、十三歳で海軍兵学校に入学、在学中に早くもスウェーデン艦隊との海戦に参加して勲章を授けられた。時あたかもナポレオンの率いるフランス国民軍がヨーロッパを席卷していた。兵学校を卒業したゴロヴニンは田舎地主として領地に落ち着くようにという親戚のすすめを斥けて、一八〇二年からイギリスに留学する。例の辞書は渡英直前に購入したのである。イギリスはこのころロシアの同盟国で、ネルソン提督が勇名をとどろかせていた。ゴロヴニンは実際にネルソンのもとで武勲をたてたこともあった。帰国してまもなくゴロヴニンは、三本マストのスループ船ディアナ号の艦長に任じられ、地球の裏側にあたる極東露領への航行を命ぜられる。その主要な任務は北太平洋海域における地理学的な探査測量であった。

そのゴロヴニンが文化八年夏千島列島最南端の国後島クニシマで日本側の捕虜になったのは、まことに不運なめぐりあわせであったといえよう。それより四、五年前、二人のロシア士官が独断で樺太と南千島の諸島を襲撃し、数名の日本人を連れ去るといふ事件があった。この知らせを受けた幕府はただちにロシア船打払令を発するとともに、奥羽の諸藩に蝦夷各地への出兵を命じ、ロシア人の再度の来襲に備えた。このような事情を予想だにせず、ゴロヴニンは飲料水を求めて国後島に上陸して、部下の二人の将校と四人の水兵もろとも捕えられてしまったのである。だが、ディアナ号の副艦長リコルドは沈着で機敏な士官であった。彼はゴロヴニンらを救い出すために、箱館の豪商高田屋嘉

兵衛を人質にしたり、イルクーツクの知事に釈明書を書かせるなど、八方手を尽くした。幕府もまたゴロヴニーンの陳弁によって先年のロシア船の「乱妨」が政府の意志にもとづくものではないことを確かめたので、二年後には捕虜全員を釈放し、迎えにきたディアナ号で帰国せしめた。

ゴロヴニーンらは主として松前に監禁されていた。ここで人情に富み勤勉な通訳村上貞助にめぐりあったことは、彼らにとって不幸中の幸いであった。松前奉行所の若い役人であった貞助は、捕虜たちに同情してよく面倒をみだし、彼らから熱心にロシア語を学んだ。文化十年の春にはオランダ通詞出身の馬場佐十郎と、数学者で曆法家の足立左内が江戸から派遣されてきた。佐十郎は十八世紀末の寛政年間にロシアから帰国した漂流民大黒屋光太夫についてすでにロシア語を学んでいた。長崎のオランダ人からも文法の教授を受けていたらしい。彼は松前へロシア語の単語集や蘭仏辞書をもってきていて、自分の知らない言葉を耳にすると、すぐにその意味を確かめるのであった。ゴロヴニーンは彼のためにロシア語の文法を書いて与えた。(この文法の翻訳も写本で今日まで伝わっている。)

さて、このときゴロヴニーンの手もとにあったのがタチシチェフの仏露辞書である。彼が国後島で囚われの身となった直後、ディアナ号に残ったリコルドは同僚たちのために、日用品をつめた数個のトランクを浜辺に届けさせた。このトランクはのちに捕虜たちに渡された。ゴロヴニーンの受け取った箱の中には、衣類や鏡などにまじってこの辞書がはいっていた。彼の愛用の書であることを、リコルドは心得ていたのだろう。

ゴロヴニーンらの帰国の日が迫ってくると、二十六歳の佐十郎と四十三歳になる左内は連日彼のもとへ通い、朝から晩まで腰を据えるようになった。昼食さえ届けさせるほどだった。それぞれ分担を決め、寸暇を惜しんで、少しでも多くの知識を異国の知識人から吸収しようとしたのである。そのうち佐十郎はタチシチェフの辞書に着目して、この大部の書物の筆写をはじめた。ゴロヴニーンが帰国にさいしてこの辞書を通訳たちに贈る気になったのは、おそ

らくその熱意にうたれたためにちがいない。

——これらのことは、ゴロヴニンがロシアに帰ってまもなく執筆し一八一六年にペテルブルグで出版された『日本幽囚記』（原題は『一八一二、一八一三、一八一三年の日本人のもとにおける拘禁中の諸事件に関する海軍少佐ゴロヴニンの手記』——この初版本も一橋大学附属図書館に収蔵されている）に述べられている。ゴロヴニンは生粋の軍人ではあったが、深い教養をそなえた人物であった。『日本幽囚記』はたんに劇的な体験の詳細な記録であつたばかりでなく、文学性に富み、かつ卓抜な日本人論を含んでいる点で、きわめてすぐれた著作であつた。その真価はただちにみとめられ、著者はまもなく文学者たちの集まりである「ロシア文学愛好者自由協会」の名譽会員として迎えられ、科学アカデミーの準会員にも選出された。また、この書物の英・仏・独訳が相次いで刊行された。ドイツ語からオランダ語訳がつくられ、それが日本に伝えられて、文政年間（一八二二—二五）に『遭厄日本紀事』と題して邦訳された。訳者は馬場佐十郎らであつた。

タチーシチェフの仏露辞書は十九世紀を通じて、この分野で最も權威ある辞書としてロシアでもてはやされた。そのフランス語の表題をここに掲げておく。

DICIONNAIRE COMPLET FRANÇOIS ET RUSSE

COMPOSÉ SUR LA DERNIÈRE ÉDITION DE CELUI

DE L'ACADÉMIE FRANÇOISE. Seconde édition

soigneusement confrontée avec l'original françois,

corrigée et augmentée par Mr. J. de Tatischeff, Conseiller d'Etat.

TOME I. A—K. à St. PETERSBOURG, 1798.

De l'imprimerie Impériale chez J. J. Weithrecht.

大きさは二二×一四センチ、九五八頁である。茶色の皮表紙がついているが、おそらくこれが元の装幀の一部であろう。

ゴロヴニンは一八〇二年に購入して以来この辞書をおおいに活用した。前後の表紙裏の見返しや遊び紙にみられるフランス語の単語をはじめとするおびただしい書込みが、それを示している。語によってインクの濃淡が異なっているのは、長い期間にわたって、必要がおこるたびに特記すべき事項を書き足していったためである。この辞書は所有者がイギリスの軍艦に乗り組んでいたときにもその座右にひかえていたであろうし、一八〇七年以降はディアナ号の艦長室の机上に立てられて、ペテルブルグから大西洋を南下して喜望峰をまわり、インド洋・太平洋を経て極東まで運ばれ、蝦夷の獄舎では持主とその運命を分かち合い、最後に彼の苦難に満ちた捕囚生活の記念として日本に残されたのである。

この辞書の日本での運命も平穩無事ではすまなかった。第一に、上巻と下巻が引きはなされるといふ悲運にあってゐる。

館蔵の上巻の表題紙には「蕃書調所」、「東京商業学校図書印」、「高等商業学校図書印」の三つの印が捺してあり、表紙左下に「東京商業学校図書」の金文字が刻まれている。安政二年（一八五五）に設立された洋学所が蕃書調所と改称されたのは、翌安政三年のことである。洋学所の母胎は浅草にあった天文台附属の蕃書和解御用局であった。馬場佐十郎は大槻玄沢とともにその最初の局員すなわち「御用係」であったので、タチンシェフの辞書もここに保管されていたのであろう。蕃書調所は、洋学調所、開成所などと名を変えて、やがて東京大学へと発展する。明治六年（一八七三）にその一部が分離独立して東京外国語学校となった。

一方、一橋大学の前身である商法講習所は明治十七年に東京商業学校と名を改め、翌明治十八年には東京外国語学校と合併、さらに明治二十年から三十五年までは高等商業学校と称した。蕃書調所から東京外国語学校を経由してこの書物が東京商業学校の収蔵に帰したとみるのが最も自然であろう。明治二十二年九月三十日付の「高等商業学校蔵書目録」ロシア書の部にはこの辞書は「タチーシチェフ氏 仏露字書」として登録されている。その価格(評価額か)は金〇・一〇〇円、つまり十銭である。

タチーシチェフの辞書の下巻は現在静岡県立中央図書館葵文庫に伝わっている。その見返しの識語は上巻とまったく同じ、書込みが多いことも変わりがない。見返しの左側に「一番甲 魯辭、魯西亜辭書 下、千七百九十八年」と墨書された細長い古ぼけた付箋が貼られているのは、ひょっとしたら天文台時代のものかもしれない。この下巻には「駿府学校」の印記があるので、維新の徳川家の静岡移封にさいし、他の二千冊あまりの洋書とともに、江戸からこの地に運ばれたものにちがいない。おそらく佐十郎の死後、もはやこの辞書を使いこなせる者がだれ一人あらわれなかったため天文台や蕃書調所などの書庫でもないがしろにされ、幕府瓦解の混乱の中で上巻と下巻がはなればなれになつてしまったものと想像される。タチーシチェフ仏露辞書のゴロヴニン手沢本は、最初の持主がロシアに帰国してからも異郷の地で数奇な運命をたどつたのであつた。(昭和五十年六月)